

アドキエメント・ノベル

チエルのグイリの

少年たち



広瀬隆

著



「ドキメント・ノベル」

チエノブイリの少年たち

一九八八年二月十日初版発行

一九八八年三月十日五版発行

著者……………広瀬隆

装幀者……………杉浦康平・十谷村彰彦

さし絵……………広瀬隆

発行者……………浅川満

発行所……………株式会社太郎次郎社

東京都文京区本郷五・三二・七 郵便番号 一一三
電話 〇三・八一五・〇六〇五 振替東京五・一三七八四五

印字……………福田工芸株式会社〈本文〉十一 蔵写植〈見出し類〉

印刷……………株式会社平河工業社〈本文〉十 株式会社フクイン〈装幀〉

製本……………ナショナル製本協同組合

定価……………カバーに表示してあります。

0036-5002-4456 © Takashi HIROSE 1988, Printed in Japan

〔著者紹介〕

広瀬隆（ひろせ・たかし）

一九四三年、東京都に生まれる。

医学書などの翻訳業をへて著作活動へ。

著書に『東京に原発を！』（集英社文庫）、

『ジョン・ウエインはなぜ死んだか』（文春文庫）、

『危険な話』（八月書館）など多数がある。

フイリの少年たち『ドキマントノベル』——広瀬隆一著

● 目次

運命の金曜日…………… 6

大草原の惨劇…………… 23

第二夜の訪れ…………… 41

危険地帯からの脱出…………… 58

孤独な少年…………… 76

検問…………… 93

チェルノブイリ現地の真相……………183

イワンの脱走……………167

キエフの空の下……………148

搜索……………130

病棟……………112

● チェルノフイリの少年たち [ドキュメントノベル]

運命の金曜日

「ああ、神様、どうか助けてください……」

ドーンという巨大な爆発音が、ウクライナの闇に轟いた。

一九八六年四月二十六日、といっても人間の感覚のなかでは、実際にはまだ二十五日の金曜日、夜十二時を回っていくばくもない、夜中の一時二十三分からはじまった出来事である。

時刻をこれほど正確に記しておくのは、これが人類にとって異様な事件で、後日に想像を絶する大惨事に発展したからである。その時には、地上の誰ひとりとして、この事態の深刻さに気づかなかった。

わずかにこれを目撃した土地の人びとは、いきなり恐怖の底に突き落とされ、暗が

りのなかで釘づけになった。鬼氣に取り憑かれ、目の前で激しく燃えさかる炎の塊を見やっているばかり。爆発した建物からは火炎が激しく立ち昇り、真つ赤な影を、つややかな黒い夜空に浮かびあがらせていた。

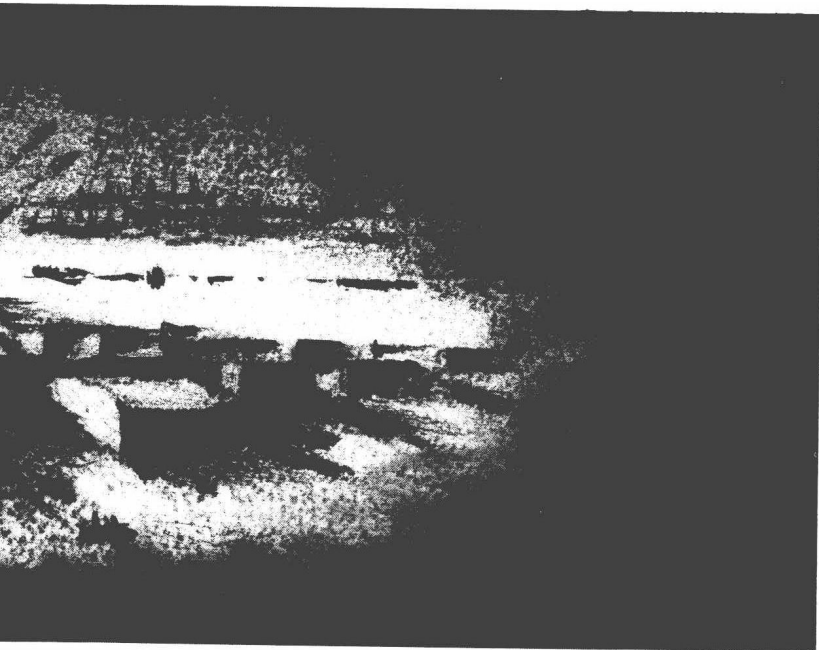
四角張って何の変哲もないコンクリートの建物だったが、いまは炎が揺らぐたびに影が踊り、全体が一羽の巨大な鳥のように動いて見えた。ちょうど中心部から大空に伸びている煙突が鳥の首のように細く、その左右にある構造物が翼のように張り出していた。

まだ十五歳にしかならないイワン少年が、この光景を一部始終、まだ何も起こらない静寂の夜景から、そこへいきなりパチパチと火花が散るように火の粉が舞いあがる瞬間まで、完全に目撃していた。イワンは翌朝、土曜日にはカリーナと学校で会い、手紙を渡そうか渡すまいかと迷っているところだった。

ベッドから身を起こし、カーテンを開いて、高層アパートの四階から何気なく遠望していた瞬間、ほんの目と鼻の先に見えるチェルノブイリ原子力発電所が、意表をついてイワンの目のなかに飛び込んできた。砕け散ったコンクリートの破片がいくつも空に舞い、同時に火炎が夜空をまばゆく照らし出したときには、少年は何も感じていなかった。オモチャのようであり、幻想でもあるような一景が、不意にパッと踊った

ただだった。

しかし、次の瞬間、ドドーンという大音響とともに窓ガラスが激しく音を立てて振動し、やがて地鳴りのように高層アパートが揺れたときには、イワンの手先が細かく震えた。体のなかで凍りついたように冷たくなり、父親の顔を思い浮かべながら、彼はまだ叫ぼうとしなかった。彫像のように動けないまま、イワンはたちまち第二の爆発を目にした。今度は火の柱が空高くまっすぐ昇ってゆき、大きな塊も吹きあげられた。じっと目を

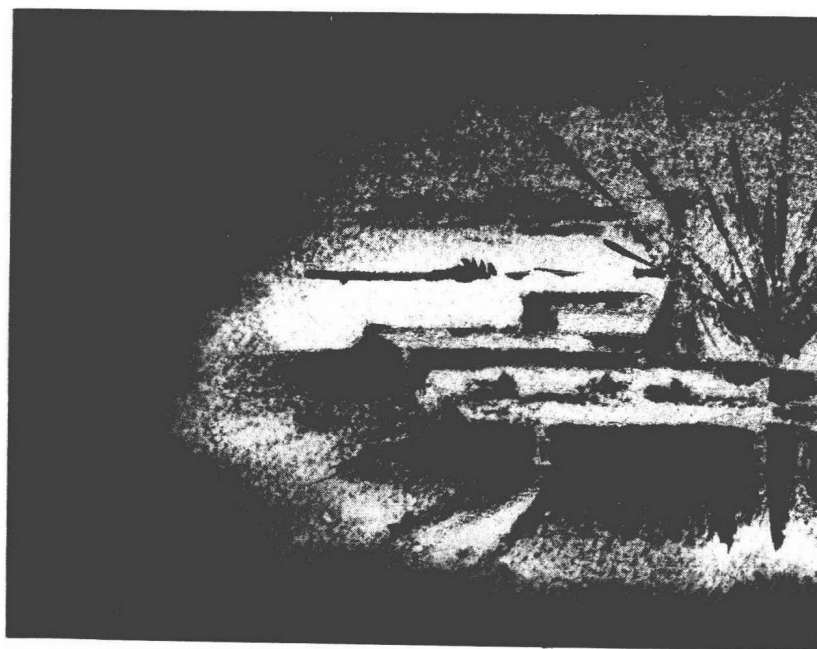


凝らすと、その塊がゆっくりと建物の別のところに落下してゆき、屋根を破壊したようだった。

おそろしいことが起こったのだ。

少年の両手は胸のまえて固く握り合わされ、思わず唇からささやくような言葉が漏れた。

「ああ、神様、どうか助けてください……神様、これが嘘でありますように……お願いします。僕たちは死んでしまう……殺さないで、まだ殺さないでください」



こう言い終えてから五秒もたたないうちに、不思議な音響が少年の耳に流れこんできた。自分の住んでいる高層アパートのあちこちで、爆発音に気づいた人びとが夢からさめ、起き立って窓を開くと、大火災が目に飛びこんできた。誰もが甲高い悲鳴をあげていた。

その声がイワンの恐怖心を一気に爆発させた。

—— 本当だ。嘘じゃない。爆発しちゃったんだ。もう駄目だ。何もかも終りだ。みんな叫んでるぞ。俺は全部見てたんだ——

こう胸のなかでつぶやいた時、部屋の扉が勢いよく開かれた。

「イワン」と言っただけ、母親は口をつぐんで、そこに立っていた。

「燃えてるよ、お母さん。どんどん火事が大きくなっていくよ！ ねえ」

相変らず外を見やっているとイワンの両眼から、涙がぼたぼたと枕に落ちはじめ、唇がげげじじじのようになったかと思うと、彼はいきなりベッドから飛び出し、床に膝をついて坐りこんでしまった。肩が大きく呼吸をしていた。

これに^{こた}応えてやれるような出来事であれば、母親のターニヤはどれほど心が救われただろう。

少年は拳を握りしめながら立ちあがると振り返り、いよいよ高まってゆくアパート

のなかの騒ぎを耳にしながら、今度は母親の顔を見つめた。薄暗がりのなかで蒼白になったきり、ターニヤは身動きひとつしなかった。その姿はこれから家族にふりかかってくる災難を見透かしたかのように、イワンの目に心細いものに見えた。

しかしふたりは、それほど長く視線を合わせ、意味深い言葉を交していることができなかった。

「電話が通じない」と、荒々しく野太い声を出しながら、父親のアンドレーがふたりの間に入ってきた。「イネッサを起こして、逃げる用意をしよう。さあ、ターニヤ、子供たちを助けたくないのか」

すでに廊下を走るやかましい足音が、アパートじゅうに響いていた。何人かの男たちは家財道具を両腕いっぱいにかかえて階段をおりてゆき、自分の車まで運んでゆくとしていた。

窓から直視できるチェルノブイリ原子力発電所は、ますます火勢を強めている様子で、目を向けるたびに、炎全体の高さが一メートル、また一メートルと上空に大きな円弧を描きながら力を広げている。

「これが」と、ターニヤはようやく口を開いた。「私たちの信じてきた世界一安全な発電所だったのね」

烈しい怒氣がこもった最後の言葉だった。

根拠のないことではない。夫のアンドレーから、絶えずそう聞かされ、実際、つい昨日まで、事実がそれを実証してきた。誰もがそこに信を置いていた。これほどおそろしい落とし穴があると、アパートの住人の誰が予測できただろう。

一体、それがなぜ爆発したのだ。

あの発電所とは、何ものだったのか。

ここプリピアーチの町は、世界一の原子力基地をめざしていたし、その日が訪れるのにあと二年のプラン、という急速な発展を遂げてきた。アパートの住人は、みな誇り高い発電所の職員家族だった。なかでもアンドレー・セーロフはこの発電所の古参組で、一点の曇りもない自信を抱いて、設計から運転作業のすみずみに至るまで監督してきた男だ。

彼は、物事を冷たく観察し、疑い深かった。自分自身に絶えず疑いを抱き、最悪の事態が百パーセント起こらないと保証できるまで、すべての指示に確認を怠らなかった。しかし、すでに今夜は、妻のひと言が彼の全人格を否定してしまい、それに反論することもできない。

現に、「アンドレーの発電所」は燃えているのだ！

決死の覚悟

イワンは父親の顔に目を向けようとしなかった。アンドレーが手渡そうとしたバスタオルを、床に叩きつけた。

「こんなものを頭に巻いたって、助かりやしないよ」

「いや、車まで行く途中で、ずいぶん違う。いいから、顔に巻いてくれ。まだ死ぬと決まったわけじゃない。生きられるんだ。約束する」

その言葉に氣を取り直したターニャは、床に落ちたバスタオルを急いで拾いあげると、息子の手に握らせた。それから彼女は、窓の外に一瞥^{いちべつ}を投げかけると、正体もなく寝入っている下の娘のベッドに走った。

イネッサは、まだようやく十一歳の誕生日を迎えたばかりだった。娘を抱きあげようとした瞬間、拡声器^{スピーカー}から流れる陰にこもった声で、アパートの住民に退避を呼びかける警告が、窓の外から聞こえた。

避難の準備を急ぐように……荷物を最少限にとどめるように……消防隊が消火作業を続けているので不安を抱かないように……子供を先に逃がすように……子供たちに

は薬を配るので、ただちに飲ませるように……窓を完全に閉めておくように……

次々と耳に飛びこんでくる言葉は、いたずらに恐怖心をあおらないよう注意深く選んで語られていたが、いよいよ底知れぬ現実がそこまで来ている緊迫した状況を伝え、三人の胸を鋭い剣のように貫いた。

やさしく起こされたイネッサは、日頃から体は弱かったが、気は強かった。父と母ばかりか、兄までが夜中に起きているのをいぶかしく思いながら三人の顔を順に見やっていたが、ただ事ではない様子を相手の目から読み取った。

急いで事情を教えられると、少女は早口に

「どこへ逃げるの」と尋ね返した。

「遠くだ」と、アンドレーの口から勢いよく言葉がついて出た。「ともかく、できるだけ遠くへ逃げるんだ。いいか、離れられるだけ町から離れろ。いいな、三人ともだ」ターニヤはその言い回しを耳にした途端、膝がぐずれおちそうになった。

「あなたは、ねえ、あなたは逃げないの」

「俺は」と言って、夫は視線を下に落としながらターニヤの両肩に手をかけた。「しばらく残って様子を見る。大丈夫だ。俺は、責任者のひとりだ。逃げれば、卑怯な男にされちまう。違う。俺には責任がある。それより、早く水筒に水を入れる。それか

ら食べ物と着替えを早く用意してやれ。イワンとイネッサ、いいか、何があってもお父さんのことを覚えてろよ。そうすればかならずまた会える。はつきり言っておくが、お前たちは遠くに連れていかれるだろう。それがいい。できるだけ遠くの町へいけるように頭を使うんだぞ。ターニヤ、君もだ」

これは、普通の火災ではなかった。原子炉が爆発し、容易なことでは燃えないはずの黒鉛が燃えているのだ。冷静な原子物理学者が分析すれば、「すでに爆発したのだから、もう水をかけてはいけない。そこに水を注げば、内部の核反応にふたたび火をつける」と忠告したかも知れない。しかし現場に駆けつけた消防士には、ただの火災でしかなかった。

火の手は、爆発した四号炉から隣の三号炉まで広がろうとし、さらに危険な状態になる可能性が高かった。消防士は文字通り決死の覚悟で建物のなかへ突進してゆき、あるいは至近距離まで近づいて放水を続けた。延焼を食いとめる作業に全精力が注がれていたのである。

一方で、爆発した四号炉の火勢はとどまるところを知らず、内部から煮え立つ金属が上空へ噴出して、アンドレーが窓から俯瞰する限り、ほとんど絶望的な事態を迎えていた。